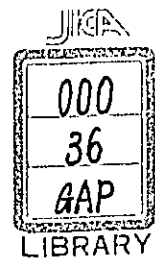


昭和五十七年度全国縦断国際協力キャンペーン講演

「我が国の果すべき国際的責任」

講師 小木曾 功
毎日新聞編集委員

昭和五十七年九月二〇日・於新宿住友ホール



「我が国の果すべき国際的責任」

JICA LIBRARY



1018623〔7〕

講師：小木曾

功

毎日新聞編集委員

講師略歴

小木曾 功

現住所 埼玉県所沢市山口五九〇―六

昭和五年八月十九日生

昭和二十八年三月 東北大学文学部社会学科卒業

昭和二十八年四月 毎日新聞東京本社入社

昭和三十一年四月 毎日新聞経済部員

昭和四十四年五月 毎日新聞経済部副部長

昭和四十五年一月 毎日新聞ジャカルタ支局長

昭和四十八年二月 毎日新聞エコノミスト編集次長

昭和五十年二月 毎日新聞編集委員

昭和五十二年二月 統一ベトナムに初の日本人記者として入国・取材

| | |
|---------------------|-----|
| 国際協力事業団 | |
| 受入 月日 '84. 6. 29 | 000 |
| 登録No. 10479 | 06 |
| | GAP |

「我が國の果すべき國際的責任」

“四面楚歌”

講師 小木曾 功

私は数日前、東南アジアから帰国したばかりです。私が東南アジアにいる時、ある國の關係が「今の日本人は三十七年前の一九四五年八月十五日ごろと同じ氣持に陥っているのではないか」と話していました。また、その關係は日本語で言うならば“四面楚歌”という意味の言葉を使っていました。彼は、今の日本は政治的にも経済的にも一種の閉塞状態にあることを指摘したわけですが、私もある程度、そうした見方に同意いたします。今日の私のテーマは「わが國の果すべき國際的責任」ということになっています。私は日本が評判が悪いのは國際的責任の果し方が下手ではないかと考えています。

それならば、日本のイメージアップを図るには何が必要か。この問題を近く中止されるインドシナ難民に対する日本政府の医療チーム派遣問題を通じて話していきたいと思ひます。

日本は貿易經濟面などで對外的にある程度のことを行っているのが現状です。にもかかわらず評判が悪い。まず、そのへんのことから話していきたいと思ひます。この一、二年、日本と日本人に対する世界の評判が芳しくないことは皆さんもご存じの通りです。貿易經濟摩擦、防衛問題などについてヨーロッパの政治家が「世界に日本とソ連が存在していなかったら世の中はもっと平和なのだが……」というようなことを言っていました。また今度の教科書問題で韓國の政治家が「日本人に良心や誠実さを求めることは無理なんだ」「日本人は非人間的で獣や化物の一種ではないか」といった調子で朝鮮半島の植民地支配に反省の色を見せていないと日本政府と日本の政治家を選び出した日本人を批判していました。

日本と日本人をめぐり世界の論調や感情が厳しくなったのは、日本が「自由世界第二位の經濟大國」と呼ば

れるようになった十年ほど前からだと思えます。一九四五年八月十五日の敗戦の日から二十年経過したかしないうちに日本は第二次世界大戦の戦勝国・イギリス、フランス、オランダ、中国などを経済力で抜いたのは勿論のこと、西歴二〇〇〇年までに世界一の超経済大国・アメリカさえ追い抜くのではないかという見方が世界的に定着してきた頃と時を同じくするように、日本あるいは日本人に対する世界の評判がだんだん厳しいものになっていったような気がします。

皆さんもご承知と思いますが、日本の評判の悪い例を一、二あげてみましょう。

外国に住んでいる日本人は、日本人だけでまともな現地社会に融け込まない。国際会議に参加する日本人はニコニコしていても余り発言せず、何を考えているか判らない。海外に進出した日本企業は、目先の儲けに懸命で、現地の教育施設への寄付や地元に対する利益還元には冷淡だ。日本の海外進出企業は何時も東京の方向から見ている。進出先国の政策や現地の人々の声には冷たい。日本人は国際社会への貢献は出来るだけ避け、均一的な人種あるいは同一言語の日本語と日の丸の旗の下で何時も一つにまとも、自分たちのことしか考えない特殊な人間である。輸入など経済面だけでなく、日本社会も日本人の心も外に向かって開かれず、何時も自分本意のことだけ考えている。日本人は金儲けだけに専念している。

こうした批評を聞くと、オーバーな表現をするならば「閉ざされた社会の冷酷な守銭奴集団」とみられているように感じます。このような外国人の目が正しいのか、正しくないのかは別として、こうした日本論や日本人論が彷彿しています。そしてこの一年の間に見うけられたように、西欧諸国の経済が苦しくなり、またアメリカとソ連の軍事力ギャップが問題になって一つの課題が出てくる度に、西欧世界の中で日本に対する感情、見方などがオクターブをあげていくように感じられます。ヒステリックに日本市場の開放を求めたり、日本の

軍事負担増大の声がアメリカ、ヨーロッパなどから挙がるわけです。

その度に、自信のある世界観や国際関係の知識を持っていない日本の政治家は、そうした声が白人社会から挙がる度ごとに、それを押えるノ－ハウを持たず、何時もおろおろし、結局、外圧に屈することになります。このためアメリカなどでは日本を屈服させる一番いい方法、あるいは日本人に対する上手な操縦法は、何時も同じ論理で脅し恫喝を繰り返していけば、何れ日本人はころりとアメリカの方に向いてくると思うようになってしまったようです。

“フェイスレス”

改めて繰り返しますが、諸外国の対日批判は、各国の内政事情や経済運営などがうまくいかない時ほど声高となります。ということは日本、日本人側に、長い繁栄のため足腰が弱くなったヨーロッパ、アメリカなどから容易に付け込まれる隙をどこかに持っているということではないでしょうか。つまり我々が外国の圧力に極めて狙われ易く、極めて付け込まれ易い隙、あるいは脇の甘さなどを持っているのではないかと感じられます。だとするならば、我々が付け込まれ易い隙、我々が持っている脇の甘さとは一体何でしょうか。

ともかく日本は、欧米市場並の開放体制を相当整えました。中国、東南アジアの人々が軍国日本の再来や可能性を危険視するほどのスピードで、アメリカに言われるままに日本の軍事力を整備増強して参りました。経済、防衛の分野では正にワシントンの言うままでした。東南アジアなどの不評や警戒心を買うほど我々はワシントンに忠実でした。

たしかに日本はある程度、お金も溜りました。経済の基礎的な力・ファンダメントは世界一といってよいほ

どのものになりました。

にもかかわらず、日本はアメリカから百点満点を戴けないばかりか、逆に東南アジアの国々からは、今回の教科書問題が象徴するように危険人物視されているわけです。ならば日本が外国から付け込まれる隙や脇の甘さは、日本が国際的にやるべきことを全く怠けているからか、どうもそうした問題ではなさそうです。

私は日本は一体、この世の中のため、あるいは世界のため、何をどのようにしようとしているのか、これが不明確であるからだろうと思います。日本はどんな国で、どんな論理で内外のことに対応しているのか、これか、何時もそれが不鮮明である。英語で言うならば「フェイスレス」であるということ。この顔がはっきりしていないため、外国に何時も付け込まれる隙や脇の甘さになっているのではないか、私はそうした気持ちを持っています。

私はほんの数日前、約一カ月、東南アジアを回って来たばかりです。また六カ月前には中南米を回りました。南米の南端の方まで行きながら「なぜ日本は欧米先進国や東南アジアの国々から好かれないのか」という問題を考え続けていました。私事で恐縮ですが、私は毎日新聞の記者のうち三分の一近くを外国で過してきました。誰でも日本を離れますと日本が却ってよく正確に見えるものです。東京の満員電車に乗らないですむせいですか、日本という国がより正確に見えます。

経済記者出身の私がインドネシアのジャカルタ支局長として赴任した一九七〇年ごろから、日本経済の巨大な影が東南アジアから大洋州にかけて覆い始めていました。「日本の新植民地主義国家」と呼ぶ声も東南アジアに満ち始めていました。「日本は第二次世界大戦で武力を使って突現できなかった帝国を戦後のいま東南アジアに経済力でつくった」という主旨の論調がインドネシア新聞などに始まった頃でした。バンコクで日本駐

在員がキャバレーのホステスに殺害されたり、ジャカルタでインドネシア女性に浴衣を着せて座敷にはべらせ
たことが問題になった頃でした。「日本黄禍論」が世界のジャーナリズムを賑わし、米ドルは切り下げられて
フロートに向かつて動き始めていた頃でした。ロンドンのエコノミストには「昇つた太陽」とか「昇り切つた太陽」
とか、経済を中心とした日本の国力を称賛する特集記事が出始めていました。その種の日本論は極く最近「世
界一の日本」まで続いていました。

しかし、こうした状況の中で、日本人はなぜ欧米や東南アジアの人々から敬愛されないのか。田中元総理が
ASEANを歴訪した一九七四年当時はバンコク、ジャカルタで反日運動に直面しました。私は当時も「なぜ
日本を犠牲にするような形で反日運動が十年に一回ぐらいで起るのか」ということを考えていました。その結
果、先程申し上げましたように、日本は何をしようとしているのかという具体的なイメージがなく、また日本
人とは何なのだという顔がないことにもとづくのではないかと、ということを考えるようになりました。

たしかに「日本の顔」について申しますと戦後の日本は平和憲法を持っています。平和国家で戦争をするこ
とを放棄しています。そしてこの憲法を支えるものとしては戦後の精神的風土とか、国民感情というものがあ
ります。これは我々日本人から見ると立派な顔のはずでした。「平和国家」日本は世界に通用する顔と日本人
は思っていました。しかし開発途上国で短期間に最大の利益を追求している日本人、あるいは回教国に行つて
も日本の会社で働いているのだからという論理でイスラムの宗教的な習慣や文化的伝統を平気で踏みじる日
本人—こうしたことで平和憲法に象徴される日本の戦後の精神や精神的風土といったものを開発途上国の人た
ちは額面通りに信じてくれるでしょうか。同盟関係にあるアメリカですら日本に対する信頼は高くないのです
から、アジアの人々や国が日本の平和憲法に対する知識を持っていても、それを生活の実感として信じられな

いことは不思議ではないと思います。

第二次大戦の戦争責任についても一億総懺悔であり、今回の教科書問題でも懺悔やミンギのような形で処理され、現在のところ政治的な責任追求の声はなく、責任問題も何れ終戦の時と同じように総懺悔という形で拡散されていくことになりました。現在、海外進出企業は世界不況の中で東京本社の儲けが薄くなれば、その不足分を海外から補おうと、あの手この手を使って稼ぎまくっているのが現状です。だからこそ「ルック・イースト」というスローガンの下に日本などをモデルに新しい国造りをしていこうとしたマレーシアのマハティール首相も最近、私が見会った時、「ルック・イースト政策というのは決してトータルな日本化ではない」と言っていました。こんなふうに最近の日本を見ながら調子を変えざるを得なくなっているのが現実です。

“ 第二の黒船事件 ”

このような時、日本のいい顔づくりと日本のイメージアップにつながったインドシナ難民に対する政府ベトナムの医療協力が実質上、中止に近い形まで縮小されることが既に内定しました。三年前、ベトナム軍がカンボジアに侵攻し多数の難民がタイに流入したことから始まった日本の難民協力は、私は日本にとり “ 第二の黒船事件 ” とさえ思えるほどの出来事だったと思います。しかし行政改革など内政上の問題から方向転換せざるを得なくなりました。このベトナム難民に対する医療協力問題は、外国のトラさん、ハッツあんにもよく判る本当にいい意味での日本のイメージづくりに直結していた仕事だと考えていただけに、日本政府の内定を残念に思い、心から惜しんでいます。

この十二月中旬でベトナム難民に対する大規模な医療チームの派遣は断念することになりました。ところが、

十二月中旬という時期は、カンボジアに関する国際会議開催を前にベトナム軍がタイの国境寄りまで反ベトナムを唱えている三派連合の民主カンボジア連合政府に対し大規模で、かつ最後とみられる攻撃をかけてくる時期だと私は判断しています。

そのような時に日本の医療チームが撤収していたら、日本を見る海外の目は再び新しい角度から厳しさを増してくるだろうと思っています。これまでの三年間に三億ドルの税金を注ぎ込み、難民救済という日本にとり始めての事件を最も積極的に取り組んできた日本の関係者の善意と努力は「九俣の攻を一簣に欠く」ことになつてしまうのではないかと恐れています。一体、日本政府の物を見る目はどこに付いているのだろうか。国際情勢を分析する物差しはどんな物を使っているのかと思いたくなるぐらいです。

この三年間、ベトナム難民救済を政府ベースで、ともかく進めて参りました。いまカンボジア国境に近いタイ側に残っている政府派遣の医療チームは日本しかない。それだけに現地では日本が初めてアジアの政治事件として、あるいは社会事件としてインドシナ難民問題に本腰を入れて取り組んでいるという評価が国際的に高くなっていました。にもかかわらず、雨期明けのベトナム軍の攻勢の際、私がいま予想しているベトナム軍の攻撃を前にして日本の医療チームが引き揚げてしまったら、あとはどうなるのでしょいか。一番大事なタイミングの時だけに、私はそのことを恐れています。

これまで日本は難民発生の国際事件に対応する場合、金と物は出すが、医療チームなどの人は出していない。いわんや難民のうち希望する者があれば日本の社会へ新しい日本人として迎え入れようとしたことは、一度もありませんでした。しかし国際的要望や日本の国際的地位から、敢えてこれに踏み切ったのは、このインドシナ難民でした。この三年の間に約四百人の医師、看護婦がカンボジア国境で医療活動に従事しました。またタ

イ經由や第三國經由で日本に上陸した難民のうち、日本定住を望む人々に許可を与えました。単一人種、単一文化の日本が閉ざしていた窓を難民に向けて初めて開いたことから、私は「第二の黒船事件」と申し上げたい。私はカンボジア事件、すなわちベトナム軍のカンボジア侵攻が発生する少し前、ハノイや旧サイゴンあるいはカンボジア国境寄りのベトナムを見て歩いていました。ベトナムの南北統一が成った直後で、初めて日本人記者として中国經由でハノイに入りました。当時、特に旧南ベトナムのカンボジア寄りのところを歩いていました。つい先ほどまでベトナムと一緒にアメリカ軍や南ベトナム政府軍と戦ったカンボジア社会主義者とハノイの間が何となく緊張に近いものに変化しつつあることを感じとっていました。メコン河の河口に近い所にカントゥという小さな町があります。周辺のベトナム空軍基地や附近の陸軍部隊を見ている時に何となくそれを感じました。ベトナム軍幹部にそのことを質問したところ、彼からは、「絶対にそうしたことはない。両者は唇と齒の関係にあるのだ」という返答しか返ってこなかった。私が外国人だったためかも知れませんが……

しかし、つい最近まで「唇と齒の関係」にあったカンボジアとベトナムの両社会主義国が銃火を交え、その結果、何十万人の人々が故郷を捨て陸路、海路を経て脱出して来た時、私は新聞紙上を通じ、あるいは政府の人に直接会って救援活動の本格化を訴えました。その後「日本は物と金は送っても医師や看護婦は派遣しない」という強い国際世論に押されて日本はインドシナ難民の救済に重い腰を上げました。

一九七五年のブノンペンとサイゴンの陥落に続き七九年一月の社会主義ベトナム軍の社会主義カンボジアに対する侵攻に伴うブノンペン再度の陥落など、インドシナ情勢の変化で現在まで六十万人のカンボジア人、ベトナム人、ラオス人などがタイに逃げ込んできたといわれています。この六十万人のうち三十八万人が米國、カナダ、オーストラリア、フランス、西独などに定住しました。これら難民の中には、再び自分の故郷カンボ

ジアにUターンして帰国した人達もいると言われています。そして残り二十万強の人達は、タイ領内に、あるいはポトトビールとして海路を脱出しフィリピン、インドネシア、マレーシア、香港などのキャンプで生活しています。

また、これら六十万人の難民のほか、いまだにタイ、カンボジア国境の原野や密林の中に三十万人近い人達がタイ領内にも入れず（これは追い返されるから）、カンボジア内の故郷にも帰れず（これはベトナム兵がカンボジア内で移動を禁止しているから）、さ迷っています。

“九俣の攻欠く”

タイ領内の代表的な難民キャンプであるカオイダンの現状を紹介しましょう。私は十日ほど前までカオイダンにいました。八〇年春から夏にかけ約十三万人の難民がカオイダン難民キャンプに収容されました。しかしアメリカへの定住、反ベトナムの三派連合政府支配地域への自主的なUターンが行われた結果、今年七月末現在の数字では三万八千八百十九人まで減りました。この数字は最高時の約三分の一に当ります。

日本政府は難民流入が本格化した際、“物と金だけでは駄目だ”という国際世論に押されて、国際協力事業団の手を借りて七九年十二月末に日大、聖霊会浜松病院の医師、看護婦さんなど第一陣二十九名をタイに送り出しました。以来、日本政府派遣の医療チームは、三カ月交替で難民医療を現地で行い組んできました。これまでに参加した大学、医療法人は日大、日本医大、東大、独協医大、昭和医大、東京医科歯科大、京都府立医大、鳥取大、新潟大、関西医大、聖霊会浜松病院、救世軍、赤十字、各国立病院などで、その数は四百人前後に達したはずで

しかし国公立大、病院の医師、看護婦さん達は行政改革で厳しい定員枠をはめられました。そのため「現在政府ベースの医療チームで残っているのは日本だけではないか」という理由で、この九月十五日に日本を発つて十二月十五日まで医療活動をする医療チームを最後に、日本医療チームは事実上、撤退することに内定しています。日本医療チームが引き揚げると、赤十字国際委員会チームも撤収することになる模様です。

カンボジア国境に近い東部タイのカオイダン難民キャンプの日本医療チームの主な仕事は外科でした。先程申し上げたように、カオイダン難民キャンプの例からみても、収容している難民数が三分の一に減少している現状からみると、たしかに仕事が減っていることは事実です。私が現地でみた数字では、日本医療チームのカオイダン難民キャンプの場合、入院ベッド数六十に対して入院患者は平均約四十人でした。ですから三分の二のベッドが塞がり、あとの三分の一は空いていることになりました。

日本医療チームの病院は、心臓外科手術以外、脳の手術でも何でも出来る設備とスタッフを揃えています。海外諸国や国際機関の医療設備とスタッフに比べても日本医療チームは設備、人の能力の点においてもナンバーワンでした。私が滞在中、外科手術は大体一日平均六、七件、行われていました。外科手術の内容は、鉄砲の弾が当たった銃創や地雷触発などの軍事的原因にもとづくもの、附近一帯で起きた交通事故など非軍事的な理由による怪我などの手術が半々でした。

銃創手術は鉄砲や砲撃で住民や難民が受けた怪我の治療です。弾の破片や砲弾の破片を体内から摘出して治すものです。一方、地雷というのは「対人地雷」といい、人間に損傷を与えることだけを狙った地雷です。それだけに極めて小さい地雷で、直径は煙草のピース缶ほど、深さは八センチ程度だそうです。普通の地雷は人が踏んだりすると爆発した破片が地表四十五度の角度で上の方に飛散するので近くにいた者は上半身や頭な

どをやられるが、カンボジアのピース缶ぐらいの対人地雷は、人が踏んだり、ピアノ線に足を引っかけて炸裂した破片が上方四十五度ではなく、地表すれすれに平行して飛散するように出来ているため、人の足に破片が食い込んだり、膝から下の部分が吹き飛ばされるように出来ているようです。難民キャンプの病院で行われている外科手術のうち、約三分の二が、この対人地雷によるものです。

いま現地は雨期です。ですから道は浸水し通れるところは軍用道路一本しかありません。その軍用道路で地雷を踏んで足を吹き飛ばされた人がカオイダン難民キャンプや日本医療チームの本部があるメデイカル・センターまで運ばれてくるわけですが、相当な時間を要し、ひどい場合には二日ほど経っています。

加えて雨期の泥水で傷口が汚れウジがわいています。足の骨も白いはずのものが黄色く変色しています。

その種の手術をする場合、日本においてはなるだけ切除する足の部分を少なくするのが常識なのだそうですが、病院に来るまでの間に汚水などに触れて二次、三次感染の恐れがあるため、くるぶしの下の方をやられた場合でも太股から切断する手術をやっています。

病院には両足が太股から切断された胴体だけのような大人も少年少女も多数います。腹が減ったので野生のバナナを取りに何時も通っている道から少し外れて林の中に入ったところ、対人地雷にやられたとか：など。

こうして足を失った人達を救うため活動しているのが、日本医療チームだっと思えます。カオイダンでは毎朝、こうした患者を日本医療チームが回診しています。カンボジア語で一番痛いことを「オーイ・オーイ」あるいは「ヨイ・ヨイ」と言うそうです。回診の時、医療チームについて行きますと、病棟全体が「オーイ・オーイ」「ヨイ・ヨイ」「死ぬほど痛いよ！」という叫び声で揺れているような感じさえ受けず。

日本政府は、こうした状況の中で行政改革などの内部事情から、この十二月十五日で日本医療チームの派遣

をストップすることを既に内定したことは、先程申し上げた通りです。

このような時に医療チーム派遣をやめることを決めた日本政府の目は、一体どこについているのかと私は申し上げたい。十二月になれば雨期は完全に明けます。と同時に、反ベトナム三派連合軍に対するベトナム軍の総攻撃が始まることはほぼ確実です。タイ軍部筋やタイ駐在アメリカ大使館の武官なども同じ見方をしています。ベトナム軍は今年末か来年春までに開かれるカンボジア問題国際会議を前に自分たちの支配地域を出来るだけ拡大し、外交用語にある「戦場で失ったものを机の上の外交交渉で取り返すことは出来ない」という事実を実証するため、いま軍備を整えています。

日本の新聞も大きく伝え、ハノイの外務大臣なども申ししていますが、ベトナム軍はカンボジアから部分的に撤兵したとされておりあります。しかし、日本医療チームがいるカオイダンには、タイの第九師団と軍服を着ない情報部隊が駐在していますが、それらの軍隊が電子装置とか、スパイとか、あるいはアメリカの人工衛星などから収集した情報によると、ベトナム軍はカンボジアから部分的に撤兵したとハノイの外務大臣は申ししていますが、実は旧南ベトナム出身で余り戦闘意欲のない弱い兵隊を部分的に帰し、交替に北ベトナム出身や中部高原地帯出身の精鋭部隊を投入したというのが実状のようです。

ベトナム軍の戦車はソ連製のT五四という大型戦車ですが、現在、この大型戦車がブノンベン周辺を含めて百三十輛ぐらいいると言われています。飛行機はベトナム戦争中、アメリカ軍と空中戦をやったMG二十一から現在MG二十三にほとんどん替えられている最中です。ベトナム軍の小銃は中国軍と同様、ソ連の突撃銃であるAK四十七ですが、これもいまカンボジアのベトナム軍は新型のAK四十七にほとんどん装備を替えている最中だそうです。この新型銃は赤外線利用の照準射撃装置が付けれられているのだと思いますが、夜でも射撃が出

来る銃のようです。ベトナム軍の兵力は十五万人。これに対するカンボジア三派連合軍は、先ほど申し上げた新型ではないAK四十七のほか、八十二ミリ迫撃砲と直径十センチ程度の簡単なバズーカー砲しか持っていない。兵力は三派を合せて四、五万人ということになっていますが、タイの第九師団長はギリラ戦が出来るような訓練された兵隊は一人から一万五千人程度とみています。

したがって、十二月に入ると十五万人対一万五千人の戦争が始まる可能性が極めて強いわけです。この双方の軍隊が衝突すれば、国境地帯にいた三十万人近いカンボジア難民や三派連合地域の住民がカンボジア兵と一緒に対人地雷の埋められた地雷源を突っ走ってタイ領内になだれ込んでくることは明白です。

タイ東部国境は「オーイ・オーイ」「ヨイ・ヨイ」という痛みと苦しみを訴える声で埋まることは確実だと思っています。

こうしたカンボジア情勢を前に、日本政府は十二月中旬で日本の全くの内政上の理由から医療チーム派遣をやめることを既に内定したわけです。私は日本人のインドシナ難民医療に対する取組み方が、現地で評価が高まっていただけに、現地に何回も足を運んで知っていただけに、日本政府のタイミニングの選択の悪さを日本の納税者の一人として私は嘆いています。

私が「九俵の功を一簣に欠く」と申しましたのも、このような理由からです。「フェイスレス」の日本人が、アジア政治社会問題である難民問題に初めて取り組み、やっという顔が出来つつあったのが、これまでだったのです。何万人のカンボジア人が顔を地雷でもがれ、後ろからベトナム軍のT五十四型戦車の砲弾と機関銃になぎ倒されながらタイ国境を越えてきても、そこには難民地帯随一の設備と技術を持った日本医療チームはいないわけです。

だとすれば、三年間の歳月と三億ドル以上の税金、そして四百人の医療チームやボランティアを送り込んで外国のトラさん、ハッツあんたちにも具体的に判るやり方で日本のいい顔を描きつつあった日本の努力は、一体どうなるのでしょうか。ちょっと強い表現でしよすが、私はこの問題を官僚的な思考や対応だけにまかせてはならないと感じています。何度も申し上げましたように、このインドシナ難民医療対策は、日本がどういふ国なのか、どういふことをしようとしているのか、外国の人々に、実感として日本人の実際の行動を通じてようやく判ってもらえ始めた初の具体的なケースであったと考えています。それだけに「九俣の功を一簣に欠く」ことを私は恐れています。

(文責 国際協力事業団・広報課)

